

## 気になるリスニング対策

### —効果的な『[spá:rk] リスニング・テスト』利用方法の考察—

梶原 均

#### はじめに

「君の受ける大学は入試にリスニングがないので、リスニングはやらなくてもいい」とか、「リスニングは国公立の2次試験にしかないから、2学期から対策を始めれば大丈夫だ」など、リスニングを軽視したような声が聞かれたときもあった。しかし、平成17年度からセンター試験にリスニングが導入されたことによって、状況は変化してきた。研究会などで他校の英語の先生に会うごとに、「おたくの学校のリスニング対策は？」が挨拶代わりになっている。特にセンター試験を受験する生徒が多い学校では、1月に終了したセンター試験のリスニングの結果を受けて、来年度の試験に向けた対策に頭を悩まされているところではないだろうか。

近年、非常に多くのリスニング教材が流通しているが、本稿では、それらの教材に少し手を加えればさらに効果的な活用が可能になるということについて述べてみたい。

#### 1. 本校のリスニング対策

本校には、視聴覚教室はあるのだが、200人収容の大教室でLLの設備もなく、またマルチメディアルームなるものもない。今までのリスニング対策は教員任せで、たいていは教科書付属のテープを聞かせて、時間があればそのlistening comprehensionをさせているにすぎなかった。リスニングに苦手意識を持つ生徒が多いことがよく報告されているが、私が受け持つ生徒たちも、高校入学時の調査で8割以上がリスニングは苦手であると回答していた。とかくリスニングは認知負荷の大きい活動であるということを、我々はまず心に留めておかなければいけない。学習者は、「集中して聞きなさい」と言われても、どうやって何に集中していいかわからないのである。つまり教える側には、学習者のレベルに応じて継続的かつ段階的に指導していく必要があるのだ。

そこで平成15年度の高校1年生からは、模擬試験でリスニングを必修にし、また数研出版の『[spá:rk] リスニング・テスト 基礎編』（編集部注：以下『スパーク リスニング・テスト』とする）を毎週1回英語Iの授業で取り扱うことにした。

#### 2. リスニングテキストの選定基準

現在、多数のリスニング教材が出回っているが、各社のサンプルを比較検討し、以下の理由で『スパーク リスニング・テスト』を導入するに至った。

- ・バランスがとれた、多様な設問がある。
- ・各Unitに難易度が明示されており、系統だった指導が可能である。
- ・解答・解説にリスニングのポイントが書かれており、何に注意を払って聞き取るかが明確なので、listening strategy養成のヒントになる。
- ・付属CDがあり、家庭学習にも役立つ。
- ・短時間でできるので、授業に取り入れやすい。

この『スパーク リスニング・テスト』を採用している他校の先生とよく出くわすが、採択理由はよく似ているのではと思う。ひと言で言うならばuser friendlyなのだ。

#### 3. 『スパーク リスニング・テスト』の使用方法

では、本題である効果的な『スパーク リスニング・テスト』の使用方法について述べたい。まず我々英語教師は、「これはリスニングのテストである」という認識を持つべきだ。リスニングのテストであれば、以下の手順で行われるのが一般的であろう。

- (1) 問題を配布する。
- (2) CDを聞かせて設問に答えさせる。
- (3) 問題用紙回収後、解答・解説を配布する。
- (4) まちがえた箇所については、家庭で解答・解説を見ながら復習するよう奨励する。

しかしこの繰り返しだけでは、特にlower learner

においては、リスニング力の向上は望めない。多くのリスニングの専門家が指摘しているように、従来よく行われてきたリスニングの演習は、リスニング力を養成しているというよりは、むしろ一連の音声テキストに関する内容理解のテストにとどまっている。つまり学習者は、なぜ正答にたどりつけなかったのか、またどんなスキルが必要なのかがわからないままなのである。リスニング力向上の手だてが何も伝授されずにテストを受け続けさせれば、当然学習者のモチベーションは下がり、かえって逆効果にもなりかねないのである。

#### 4. 効果的な『スパーク リスニング・テスト』の利用法

では、よりリスニングの力をつけるにはどのようにすればよいのであろうか。『スパーク リスニング・テスト』を授業に組み入れた、効果的なリスニング力養成を旨とした指導例を以下に紹介したい。

a good listening teacher とは、リスニング活動の前に、生徒をリラックスさせたり、何に注意を払って聞き取るべきか明確な指示を与えたりする。また必要に応じて、聞き取りのヒントを与えることも忘れてはいけない。同時に、listening strategy を紹介して生徒にそれを試行させ、strategy を使用する前後でどのような変化があったかを常に確認していくサイクルを作り上げることが必要である。

##### 問題を始める前に

##### (1) Teacher's Talk

教師は、生徒の反応を肌で感じ取ることができる。生徒の表情をよく見れば、英文が難しいかどうかは大体わかるものである。生徒の反応に応じてスピードを変えたり、繰り返したりパラフレーズしたりできるのは、教室にいる教師だけである。教師の肉声にまさる音声インプットはない。これはふだんの授業で実践できることである。例えば、small talk(身近な話題:学校行事, 読んだ本, 見た映画, TV, etc.) をしたり、英英辞典から新出単語を紹介したり、riddle, joke, quotation, 新聞のheadlineなどを紹介したり、短時間でできるものがたくさんある。どんなに忙しくても、授業中に1回はこのようなコーナーを作り、できるだけ多様な英語音声に触れさせておきたい。またこれは教員自身の自己研鑽にもなる。できるところから始めようではないか。

##### (2) Consciousness-Raising Activity

listening strategy の代表的なものは prediction である。real world では聞き手は無意識のうちに“予測”をしているわけであるが、「リスニング」のテストの場合は、問題用紙の設問や流れる英語音声の情報を最大限に利用することが不可欠である。音に敏感になる活動として、映画やドラマの一部を聞かせて以下のことを考えさせる。

- ・ 何人が会話しているか。
- ・ 年齢, 性別
- ・ 感情(喜怒哀楽)
- ・ 人間関係(親子, 教師と生徒, 友人どうし, etc.)
- ・ 状況(電話, ビジネス, 空港, レストラン, etc.)

ここでは、英単語を聞き取るだけがリスニングではないということと、音声には多くの情報があり、それを推測していくことが重要であるということを確認しておきたい。この活動の目標は100%の理解を学習者に期待するものではないので、authentic な音源を提供することによって刺激を与えたい。

##### (3) Strategies Training

strategies training の留意事項として、strategy を紹介するだけでなく、実際に生徒に試行させることが不可欠である。ある研究によると、strategy は少なくとも4~5回以上は練習しなければ身につかないと報告されている。strategy には、継続して訓練することによって確実に伸びるものもあるが、一方ではすぐに効果がでない、あるいは学習者の個性によって向き不向きなものもあることを心に留めておく必要がある。つまり listening strategies training においては、まずいくつかの strategy を紹介して選択肢を用意し、生徒自身が最も適したものを選び試行していくという、段階的で柔軟な指導が必要だと思われる。以下、リスニングの2つの strategy を指導する手順を、『スパーク リスニング・テスト』を使用した例を用いて紹介したい。

##### ● Prediction

prediction は、リスニングにおいて最も重要な strategy の1つである。現実の世界では、聞き手は「だれが」「どういう目的で」「だれに向けて」話をしているかがわかっているという前提で音声を聞いている場合が多いが、リスニングのテストでは、まずこの背景的情報が欠けており、その情報不足が聞き手にとって大きな負担になることがある。

『スパーク リスニング・テスト』を使った指導例:

- ・Unit 3 は、8つの絵があり、それぞれにつき3つの英文A～Cが読まれ、その中から絵の内容に最も合うものを選ぶという問題である。そこでまず1分時間をとり、各絵の横に予想される場面や英単語を3つずつ書かせる。
- ・Unit 8は、2人の会話の後で質問が読まれ、その答えとして最も適当なものをテスト用紙に印刷されたA～Dから選ぶ問題である。そこで、設問1から8を1分間黙読させてそこから得られるヒントを探させるわけであるが、具体的な方法として、ヒントになりそうな単語に○をつけさせたり、あるいは何を聞き取ればいいのかをメモさせたりする。実際に音声流れる前に何人かの生徒に尋ねてみる。想像力豊かな予想をする生徒もいて、楽しめる。このことによって心理的な準備もできてリスニングの負担も軽減する。当然予想が大きく外れることもあるが、予想を立てて準備することが大切であることを重ねて強調し、奨励したい。

#### ● Note Taking

テストの音声流れる前に設問に目を通し、そこから得られるヒントを頭の片隅に置きながら問題に望むのが理想だが、生徒をよく観察すると、音声流れて終わってから鉛筆を持つ者もいる。つまり彼らは、何もメモを取らずに記憶力だけに頼っているのである。逆に、難易度の低いものについてメモを取らせずに「リスニング・テスト」させてみてもおもしろい。メモを取ることがいかにリスニングの理解度の手助けになるかが、実感できるであろう。

『スパーク リスニング・テスト』を使った指導例:

Unit 10は、人物の絵があり、その絵に関する英文と質問が読まれ、絵を見ながら最も適当な答えを選ぶ問題である。そこで、絵の横に名前、特徴などをメモしながら解答していく。人物名や特徴を正しい英単語で書く必要はないが、略語や記号の実例を挙げ、確実に再現・利用できるようにしなければならない。しかし学習者にとって、この「メモ」がそう簡単ではないのである。板書以外にポイントを書くことができるのは、むしろ少数ではないだろうか。授業のときに板書だけを写していたり、またノート指導をふだんしていなければその差は広がる一方で

ある。note takingはアカデミックな講義では不可欠なスキルである。

#### 5. スクリプトの利用法

『スパーク リスニング・テスト』終了後は解答・解説をすぐに配布して、まずその場で自己採点させ、スクリプトを黙読させる。さらに、聞き取れなかった語、聞き違いをした語をマーキングするよう指示をする。時間があれば、スクリプトの音読やシャドーイングなどをさせるのも、リスニング力養成に効果的であると思われる。

#### おわりに

教師が、教室にCDデッキを持って行ってスイッチを押すだけで「リスニング対策をしています」などとのんきなことを言っている時代は終わった。

生徒にとってリスニングは、その特質(聞き手がスピードをコントロールできない、連結などによる音の変化など)により認知負荷の大きい活動である。教師は、テストの結果だけを追い求めるのではなく、リスニングのプロセスに目を向け、きめ細かく指導することが必要であると痛感している。つまり、いかに学習者の心理的負担を軽減し継続的な力をつけていくかが、今後の大きな課題であると考えている。

生徒あるいは教材まかせのリスニング指導ではなく、「リスニングのテスト」をする前・中・後に少し手を加え、系統だったリスニング力養成演習を授業に組み込むことによって、大きな効果が期待できるのではないだろうか。センター試験へのリスニング導入が、英語教育により波及効果を及ぼすことを期待している。そして今後も数研出版の『スパーク リスニング・テスト』と上手なお付き合いをしていきたいと考えている。

#### 参考文献

- Lynch, T. and Mendelson, D. J. (2002). Listening. New York: Arnold.
- Rost, M. (2002). Teaching and Researching Listening. Malaysia: Longman.
- Ur, P. (1984). Teaching listening comprehension. Cambridge: Cambridge University Press.